DOCTOR'S INTERVIEW

WATARU SASAO

北海道立羽幌病院

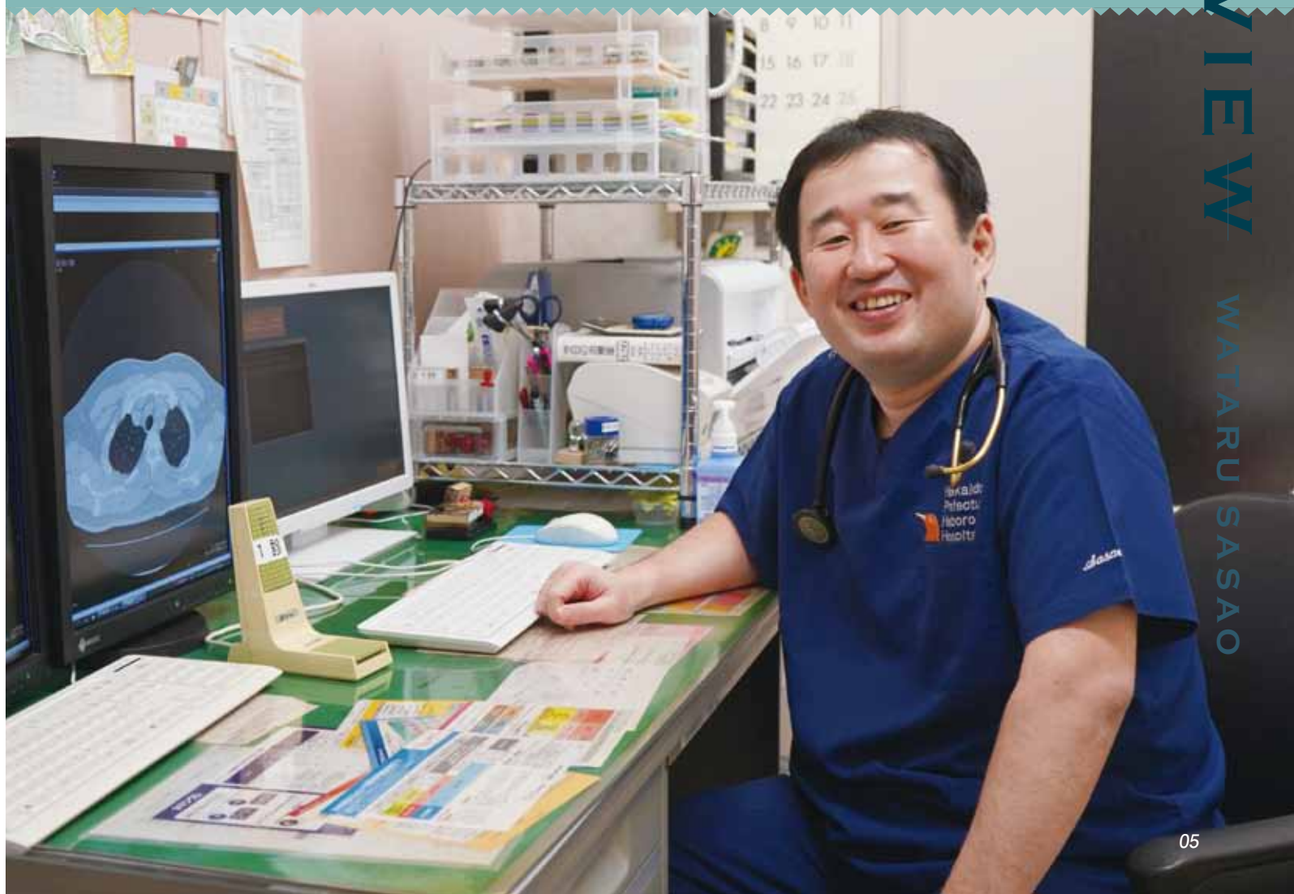
佐々尾　航 先生

すべて一人で背負うことはない 大切なのは初期判断

日本海側の羽幌町で10年以上にわたって地域医療に携わる佐々尾先生。
医療・介護・福祉が連携しながら、地域包括ケアシステムを構築してきた。
数多くの研修医や学生を受け入れてきた経験から提案する、
これからの北海道における医師の働き方とは。

北海道 羽幌町

日本海に面した農業と漁業が中心の町。札幌から車で約3時間の距離に位置する。海鳥や原生林で有名な天売島と焼尻島の2島を含む。夏季には多くの観光客で賑わう。人口6,333人（令和5年1月末時点）



患者さんとコミュニケーションを取る佐々尾先生。羽幌病院は自治医科大学の出身の医師が歴代に多く、長い時間をかけて地域との関係性を築いてきた。

総合診療のマインドを持って自分にできる範囲で対処する

北海道立羽幌病院は羽幌町と近隣4町村を診療圏域としている。人口で言うと1万6千人ほどだ。副院長を務める佐々尾航先生は、2013年から10年にわたり、地域の患者さんと向き合ってきた。

「地方での医療は『自分一人ですべてこなさないといけないのでは』とハードルが高く感じられるかもしれないが、一人の医師が全部やる必要はない」。開口一番に話してくれたのは、へき地診療のイメージを取り払う内容だった。

羽幌病院のようなへき地中核病院では、総合診療のマインドを持って初期対応にあたる能力が求められる。「救急車のサイレンが鳴ったら、どんな重症者でも受け入れます。何もせずに45分以上離れた留萌や名寄に行ってください、とはならない」。手術こそ行うことはないが、命の切迫した患者さんを受け入れることはある。可能な範囲で処置をして、それでも対応が難しい場合は近隣病院に転送する。へき地の総合診療医に求められるのは初期判断の能力だ。

誤解されている総合診療 医師にも広く知ってほしい

総合診療の現場で働く佐々尾先生は、「総合的に診るということは、人間の身体を診るだけではない」と訴える。一般の人や医師の中にも、総合診療とは「患者さんから症状を聞いて診療科への振り分けをすること」あるいは「あらゆる診療科で診断のつかなかった患者さんの対応すること」だと考える人が多いとか。佐々尾先生が担っている総合診療はそれらとは異なる。身体はもちろん、心理的にも社会的にも配慮し、生い立ちから家庭環境を含めて多角的に診ているのだ。

羽幌病院では医師と看護師、社会福祉士、ケアマネージャーが連携し、患者さんとその家族にとってより良いアプローチについて話し合ってきた。入院中だけでなく、退院後のケアはどうするのか。スタッフは情報を共有し、患者さんにとって最善の方法を選択している。「都会では顔の見える関係は作りにくい。でも田舎では医療・介護・福祉の資源が手にとるようにわかるし、活用もしやすい。専門スタッフの知恵を借りながらアップデートできるんです」。厚生労働省は団塊の世代が75歳以上となる2025年を目途に、地域包括ケアシステムの構築を推進している。今後の地域医療には、羽幌病院のような取り組みが欠かせないだろう。

羽幌病院には定期的に学生や研修医がやって来る。学生の実習や研修医の臨床研修の他、総合診療や家庭診療の専門研修プログラムが受けられるからだ。「総合診療に関心のある学生や研修医は一定程度いる。彼らをつなぎ止め、さらに裾野を広げていきたい」と佐々尾先生。研修を体験した学生や研修医の中には、総合医療の現場を目にして「自分には大変」と離れていく者もいるのは事実。興味を持つか、ハードルが高いと感じるか。どこに興味関心を見つけるかは、医師それぞれの考え方次第だ。

写真上／奥に見えるのが焼尻島。天候によっては100kmほど離れた利尻島が見えることも。日本海に沈む夕日は絶景。羽幌町は甘エビが多く獲れることでも有名。
写真下／医師臨床研修の受け入れは年間20名ほど。医学生、看護学生、栄養学生の実習も受け入れている。この日も1名の学生が実習中だった。